

ヨーゼフの没後 150 年をネルソンスが振る

若宮 由美 (op.257)

2020 年はヨーゼフの没後 150 年です。ヨーゼフ・シュトラウス(1827-70)は、ヨハン 2 世のすぐ下の弟にあたり、兄とともにピアノの習得に励みますが、父ヨハン 1 世にはまったく関心がなく、さらに父は家を出てしまい、兄弟とも疎遠なまま亡くなりました。そのような家庭環境でヨーゼフは技師になりますが、多忙の兄が倒れたために手伝いに駆り出されて、音楽家になりました。ロマン派音楽に傾倒し、42 歳で亡くなったヨーゼフの曲を、41 歳のネルソンスが振ります。

カール・ミヒャエル・ツィーラー：オペレッタ《放浪者》序曲

Carl Michael Ziehrer: Overture zu "Die Landstreicher"

ツィーラー(1843-1922)はウィーンで生まれで、その地で亡くなりました。1863 年 11 月 20 日にウィーンのディアナザールでデビューし、ダンス音楽の分野で名を成しますが、オペレッタの分野でも活躍しました。《放浪者》は、ヨハン・シュトラウス 2 世(1825-99)が亡くなってから約 2 か月後の 7 月 29 日に、プラーター夏の劇場である「ウィーンのヴェネツィア」で初演。プロローグと 2 幕から成る劇。その冒頭を飾るのが序曲です。

ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ《愛の挨拶》op.56

Josef Strauss: *Liebesgrüße, Walzer, op.56*

1858 年 6 月 1 日にフォルクスガルテンで《愛の挨拶》を初演。この頃、ヨーゼフ (1827-70)は娘カロリーネが誕生したばかりでした。翌々日付の『劇場新聞』には、「このワルツは、シュトラウスの全作品と同様に、きわめて旋律が美しく、華やかな楽器法で書かれている」と書かれています。9 月 19 日にハスリンガー社から出版譜が発売。

ヨーゼフ・シュトラウス：〈リヒテンシュタイン行進曲〉op.36

Josef Strauss: *Liechtenstein-Marsch, op.36*

1857 年 5 月にウィーンのヘルナルスにおいて農業協会の創立 50 周年を祝してオーストリアの農夫と地主のための祭典が開催され、それにあわせてヘルナルスのウンガー・カジノでは、5 月 17 日(日)に同協会のかつての代表者が参加してフェストコンサートが開かれました。天候不順にもかかわらず、アロイス・リヒテンシュタイン侯(1796-1858)が同協会の代表としての職務を務めた業績を祝して、ヨーゼフは同曲を披露しました。

ヨハン・シュトラウス 2 世：ポルカ《花祭り》op.111

Johann Strauss (Sohn): *Blumenfest-Polka, op.111*

「花祭り」はオーストリア皇室に代々伝わる行事で、当初ブルク劇場脇にある皇室のグラスハウスガルテンで 1852 年 5 月 11 日に開かれ、ウィーン滞在中のロシア皇帝ニコライ 1 世(1796-1855)も招待されるはずでした。しかし、どしゃぶりの悪天候だったため「花祭り」は 5 月 18 日に延期され、その間にロシア皇帝もウィーンを離れてしまいました。その結果、これよりも前の 5 月 14 日に大公妃ゾフィー(1805-72, 皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世の

母)の命名日を祝って、フォルクスガルテンのカフェテリア店主コルティが春祭りを催し、シュトラウス楽団とロシア大公コンスタンチンの連隊付軍楽隊が同曲を演奏しました。

ヨハン・シュトラウス 2 世 : ワルツ 〈シトロンの花咲く国〉 op.364

Johann Strauss (Sohn): *Wo die Citronen blüh'n, Walzer, op.364*

《こうもり》が大成功をおさめてから 1 ヶ月後の 1874 年 5 月 1 日に、ヨハン 2 世はドイツの楽団(ランゲンバッハ楽団)を率いてイタリア演奏旅行に出発。この曲は 5 月 9 日、トリノのテアトロ・レヅジョで〈美しきイタリア〉という題名で初演。ウィーンに戻って演奏するにあたり、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』の有名な一節、「ミニョン」に由来する題名に変更されました。ウィーンでは、園芸協会の花のホールで 1874 年 6 月 10 日にランゲンバッハ楽団がユリウス・ランゲンバッハの指揮で演奏しました。

エドゥアルト・シュトラウス : ポルカ・シュネル 〈警告なしで〉 op.132

Eduard Strauss: *Knall und Fall, Polka schnell, op.132*

エドゥアルト(1835-1916)は 1876 年には楽友協会(いまの建物ではなく、前の場所)やゾフィーエンザールなど、いつもの会場で演奏しました。題名の”Knall und Fall“は G.E. レッシング(1727-81)の『賢者ナータン』(1779)の第 3 幕第 10 場にてくる獵師の会話の表現です。1876 年にヘルナルスにある軍隊の子女のための教育機関で初演されました。

フランツ・フォン・スッペ : オペレッタ 《軽騎兵》 序曲

Franz von Suppé: *Ouverture zu "Leichte Kavallerie"*

スッペ(1819-95)はダルマチア地方スプリトに移住したベルギー系貴族に生まれ、ヨハン 2 世よりも早く、ウィーン風オペレッタを書き始めた作曲家として知られています。《軽騎兵》は 1866 年 3 月 21 日、ウィーンのカール劇場で 2 幕物として初演されました。

ヨーゼフ・シュトラウス : ポルカ・フランセーズ 〈キューピッド・ポルカ〉 op.81

Josef Strauss: *Cupido-Polka, Polka française, op.81*

ヴェンツェル・ミュラー(1767-1835)は人気のあったジングシュピール《プラハの姉妹》(1794 年 3 月 11 日初演, レオポルトシュタット劇場)の感情豊かなアリアで「愛らしい小さな愛の神 (=キューピッド)」を用いました。1860 年の謝肉祭においてヨーゼフはこの小さな愛の神にポルカを捧げました。前年の 1859 年に北イタリアで敗戦し、ウィーン人は打ちひしがれていました。1860 年 2 月 13 日にゾフィーエンザールでの慈善演奏会で演奏。

ヨハン・シュトラウス 2 世 : ワルツ 〈もろびと手をとる〉 op.443

Johann Strauss (Sohn): *Seid umschlungen Millionen, Walzer, op.443*

ヨハン 2 世と J.ブラームス (1833-97) は長年の友人でした。作曲を始めた頃、ヨハン 2 世はこの曲を効果的に発表する別のチャンスを得ます。それは 1892 年の「国際音楽演劇博覧会」。結果的に、同曲はブラームスと博覧会に二重献呈されました。しかし、初演のいざこざもあり、ヨハン 2 世は博覧会の開幕式を欠席し、それが原因で芸術家の強力な支援者であり、博覧会主宰者でもあるパウリーネ・メッテルニヒ侯爵夫人 (1836-1921) と不仲になりました。題名は、シラーの有名な詩 (ベートーヴェンの第 9 交響曲にも使用) に由来し

ますが、題名を振って「さあ、数千万をむさぼろう！」と揶揄されたといひます。

エドゥアルト・シュトラウス：ポルカ・マズルカ〈氷の花〉 op.55

Eduard Strauss: *Eisblume, Polka mazur, op.55* (Arr. W. Dörner)

1867年晩秋にテオフィル・ハウゼンの設計で建築が始まり、1870年1月5日に堂々とした楽友協会の建物(現在、ニューイヤール・コンサートが行われている)は完成しました。翌日には、初めての楽友協会コンサートが黄金ホールで行われ、1月15日にウィーン楽友協会の開場記念舞踏会が開かれました。3兄弟が揃ってシュトラウス楽団を指揮し、エドゥアルトはこのポルカ・マズルカを初演。この曲は楽友協会に献呈されました。

ヨーゼフ・ヘルメスベルガー2世：ガヴオット

Josef Hellmesberger(Sohn) : *Gavotte, o.op.* (Arr. W. Dörner)

ヘルメスベルガー2世(1855-1907)はウィーン生まれ。父ヨーゼフ1世(1828-93)の設立したヘルメスベルガー四重奏団に1875年より第2ヴァイオリンとして加わり、1884年宮廷歌劇場のバレエ監督、1890年にはウィーン・フィルハーモニーのコンサート・マスターを経て、マーラーの後任として1901-03年にウィーン・フィルの指揮者を務めました。ウィーン宮廷歌劇場との関係で、数多くのバレエ音楽やダンス曲を世に送り出しています。

ハンス・クリスティアン・ロンビ：〈郵便馬車の御者のギャロップ〉 op.16/2

Hans Christian Lumbye : *Postillon-Galopp, op. 16/2* (Arr. W. Dörner)

ロンビ(1810-74)はデンマークの作曲家。「北国のヨハン・シュトラウス」と異名をとります。1839年にヨーゼフ・ランナー(1801-43)やヨハン・シュトラウス1世の音楽を知り、新しい様式をとるようになります。このギャロップは1840年11月21日にコペンハーゲンのホテル・ダングルテルで初演されました。出版譜では、C.C.ローゼ社から刊行された『優雅なダンス集』(5曲のギャロップ)op.16の第2番に収められています。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：〈12のコントルタンツ〉 WoO 14 (選抜)

Ludwig van Beethoven: *Zwölf Contretänze, WoO 14* (Auswahl) 1, 2, 3, 7, 10 & 8.

2020年はベートーヴェン(1770-1827)の生誕250年。この舞曲集は1802年にウィーンのモロ社から広告が出されています。自筆譜には『フリードリヒ氏のための舞曲集』と上書きされており、この人物は医者J.A.シュミット教授(ピアノ三重奏曲 op.38の献呈者)の助手J.B.フリードリヒといわれています。コントルタンツは男女が向かい合って踊る2/4拍子の素朴な踊り。第7曲はバレエ音楽《プロメテウスの創造物》op.45(1801)のために考えられたもので、バレエ音楽の終曲のほか、ピアノ変奏曲 op.35(1802)、交響曲第3番〈英雄〉(1803)にも使用され、「エロイカ」主題と呼ばれています。

ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ〈楽しめ人生を〉 op.340

Johann Strauss (Sohn): *Freuet euch des Lebens, Walzer, op.340*

3兄弟が揃った1870年1月15日のウィーン楽友協会の開場舞踏会では、ヨハン2世はメインとなるワルツを献呈。J.M.ウステリの「人生を楽しもう、もっと灯火が燃え上がるように」という1793年の詩があり、1794年頃からH.G.ネーグリが曲をつけて世に広まりま

した。題名はそれに由来します。この曲は、後にスペイン王アマデオ1世(在位 1780-73)となるアメデーオ・フェルディナンド・マリーア(1840-90)にも 1872 年か 73 年に献上。

ヨハン・シュトラウス 2 世：〈トリッチ・トラッチ・ポルカ〉 op.214

Johann Strauss (Sohn): *Tritsch-Tratsch-Polka, Polka schnell, op.214*

1858 年夏にヨハン 2 世はパヴロフスクに行き、ロシアの貴族令嬢オルガ・スミルニツカヤ(1837-1920)と秘められた恋に熱をあげていました。ウィーンの人びとはそれを噂しますが、「トリッチ・トラッチ」には「噂ばなしをする」という意味を込められています。また同年 3 月には、作家の A.バリーが風刺雑誌『トリッチ・トラッチ』を創刊。この雑誌のタイトルは、1833 年のネストロイ(1801-62)による笑劇《デア・トリッチトラッチ》(音楽：アドルフ・ミュラー1 世)に由来し、この劇は 1858 年にも劇場にかけられていました。ウィーンに戻ったヨハン 2 世は 11 月 24 日にブルク斜堤にできた「大きなマヒワ亭」で演奏。

ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ 〈ディナミーデン〉 op.173

Josef Strauss: *Dynamiden, Walzer, op. 173*

1856 年 1 月 30 日、ヨーゼフは王宮のレドゥーテンザールで開かれた工業舞踏会で初演。「分子や原子などが引き合う力」を指す造語で、副題は「秘めたる引力」。1857 年に機械技師の F.レッテンバッハー(1809-63)が考案しました。1840 年代から急速な工業発展が始まり、その裏で目に見えない神秘的なものへの関心が高まりました。また、リヒャルト・シュトラウス(1864-1949)は《ばらの騎士》(1911)のワルツ (第 2 幕) にこの旋律を引用。